

池田小菊未発表原稿

淋しき存在

翻刻・解説 吉川仁子

弦巻克二

電燈が消えて、薄白い朝の光線が、戸の隙間から洩れた。とうとう夜が明けたと、彼女は思った。妹を起さないやうに、窓の戸を一枚だけ、そつと開けた。心はそれ程疲労を感じてゐないのだが、外の光線に突當つた瞬間、軽い眩暈を感じた。彼女は直ぐまた、開けた戸を半分程戻し、障子を閉めた。隣の屋根の所々に、雪が残つてゐた。

ミスは、衰へた目を彼女の方へ向け、不安な表情をした。机の上の時計を見た。六時前だつた。前日の八時から、丁度二十二時間になると思った。

彼女は、看病の爲に夜明しなどしたのは、初めてだつた。両親にもきやうだいにも死別れて、今では妹と二人き

りになつてゐるのだつたが、看病らしい看病は、誰の時にもしなかつた。父の時には、電報で呼寄せられて、帰つたら死んでゐたのだつた。彼女は子供の時から、父と仲善くしなかつたので、それ程の別れ方をして、大した心残りを感じなかつた。二人の親に分けて持つ筈の情愛を、彼女は母だけに持つてゐた。父の死顔を見て、母だつた場合を想像し、涙を零した程だつた。それでゐて母の時にも、逐にしみじみとした看病をせずには別れた。病氣中に帰るには帰つてゐた。が、其の頃には未だそれ程弱つてもゐなかつたし、母は平生達者自慢だつたので、彼女の方でも氣を許してゐた。すると母は、心臓麻痺を起して、急に斃れて終つたのだつた。姉の死んだのは、彼女の子供の時だつたし、兄は旅先で死んだのだつた。肉親に縁の薄い自分の身

淋しき存在

池田小糸

電燈が傍に、薄白い靴の足像が、戸の隙
向から流れた。とうとう夜が明け、彼女
は空の、妹を捉えたい如くに、家の戸を
抜けた。とうとう明け、心はそれ程静かさを感
じた。外の光線は、雲の影をうつし、
、軽い眩暈を感じた。彼女は直に、開け
た戸を半分開き、障子を開いた。隣の扉根
端の、雲が透つて来た。
ミスは、養へて用を彼女の方へ向け、不
意に表揚を上げた。機の上の時針を現した。その時
分の針、巻口のハチが、一巻をこなす時向に
なると言つた。
彼女は、看病の爲に在明しなるといふのは、
初めを知つた。両親にもきやういにも死別
れて、今では妹と二人きりになつてゐる。

を思ふ度、彼女は何時も、看病と言ふ事に、悔恨の情に近い心残りを感じた。さうして、彼女は其夜、小糸（ミス）の看病の爲に、夜を明かしたのだつた。

ミスは毛布にくるまれて、彼女自身の掛け蒲團を四つ折りにした上に、乗せられてゐた。傍には、検温器と、注射の道具と、水薬の瓶と、それを吞ます時に用ふスポイトなどの乗つた盆が置かれてゐて、小型の暖爐では、石炭が燃え続けてゐた。ミスは、風邪から、急性肺炎になつてゐるのだつた。

病氣の變つたのは、前の日の朝だつた。其の時刻から、ぶつ通しに、彼女は酸素吸入をさせてゐたのだつた。酸素吸入の道具を見たのも、彼女には初めてだつた。人間だと、鼻の上に冠せかけるやうにして置けばよいやうだつた。が、ミスにはそれが出来なかつた。自分の病氣に、好意を寄せてゐる主人であることを、知らないミスではなかつた。それ程上等なのではないが、ミスは平生、人間の素振りや表情を、よく読取つた。だが、吸口を持つて行くのと、羅針儀の指針のやうに、ミスは鼻の向きを變へるのだつた。ミスの鼻には、酸素の臭が強く応へ過ぎる事もあらうし、硝子で造つた吸口など差向けられると、本能的に恐

怖を感じるらしかった。其のため、彼女は吸口を手離すことが出来なかつたのだつた。ミスに氣附かせないやうに、ミスの鼻に連れて、絶えず吸口を轉がす事を、しなければならなかつたのだつた。それにもう一つ、胸の濕布を二時間置きに取替へることだつた。ミスは、濕布は嫌はなかつた。が、何しろ生死の境にあるので、身体を動かす事が大変だつた。前夜寢床をとる時には、妹と代りばんこに見てやる約束で、暖爐の傍に、一人分だけ用意したのだつた。が、寢坊な妹を起すのは可哀さうでもあり、さうしなければ、彼女の氣も濟まなかつたのだつた。

其處は、古いみやこまちの場末だつた。燐寸箱を立てた程の小さい二階建てで、裏は学校の植物園、表は通りから三十間許りも引込んだ、露路の中だつた。西隣は空地で、素晴らしく高い榎や、土地の人が鶴の子と言つてゐる、小さい実の鈴なりになる柿の木が立つてゐた。晝は兎に角、夜は全くの一軒家だつた。ミスは、その二階の六疊で、病んでゐるのだつた。

彼女はミスの傍に戻り、そつと毛布を除けた。そして、検温器の先をアルコールで拭つて、静かにミスの肛門へ挿込んだ。股の間へ手を入れて見た。熱には變りがないやう

だつた。臉を開けて見た。結膜が暗黒色を帯び、チアノーゼに陥つてゐる事が、明瞭に見えた。これ程神妙に酸素を送つてゐても、斯う目に見えて、血中に炭酸瓦斯を含んで来るやうではと思ひ、彼女は少し氣を落した。検温器を抜いて見た。三十八度五分きりなかつた。犬の体温は、人間より一度位高いのだつたから、これでは心配の要る熱ではなかつた。だが、全体の様子から見て、とても助からないのではないかと思つた。

思ひ思ひ、彼女は母の事を思出した。母が、斯うした孤獨な生活をしてゐる二人の娘を、地下から眺めて、どんな思をしてゐるだらうかと思つた。若し、父と母とが巡り合ひ、沙婆通り、冥土でも一つの家を持つてゐるなら、父母は、彼女達の事について、どんな事を話合ふだらうかと思つた。

父が眺めて、
「あれも歳をとり、いぢらしい事をするやうになつたものぢや」

と、いとしがつてゐるだらうか。そんな事を思ふ前に、父のことなら決つと、
「阿呆らしい眞似をしゃがつて。あれのする事は大体胴身

に泌みてやせん」

と、不愉快な顔をしさうに思はれた。

世間の人々が眺めても、彼女の此の營みを、馬鹿々々しい事だと、笑ふに決つてゐた。彼女自身にも、自分のしてゐる事が、馬鹿々々しいのか、馬鹿々々しくないのか解らなかつた。事実彼女は、有り餘る金を持つてゐるのではなかつた。今日は其の金を費ふ事が出来ても、明日になると、どうして生きて行けばよいのかを、先づ考へなければならぬ。懐だつた。それでゐる彼女は、多分父の言ひさうな「阿呆らしい眞似」をしないのでは、落着いてゐられなかつたのだつた。彼女の氣持は、父のやうな考の人には、解る筈がなかつた。世間の幸福な人にも、解らないであらう。只、母が眺めて、しみじみ泣いてゐようと思ふと、彼女の心は慰められるのだつた。冥土の母も歳をとり、一筋残らず白髪になつてゐようと思つた。母は、彼女の肩切りしかない、小さい人だつた。父の死後、孤獨な母の暮しを慰めたい心から、彼女は時々故郷へ歸つたが、其の頃から、母は棕櫚竹の杖をついてゐた。彼女は、其の頃の母の姿を思出した。眩しさうな目をして、此の沙婆を遙々見上げ、目を拭いてゐる母の姿が、見える氣がした。

二

ふた月許り前の夜だつた。

彼女は街を歩いてゐた。すると、何處からともなく出て来た、薄穢い女の子が、彼女の袂を握つてゐた。

「奥さん辻占一枚買うて下さい」

辻占の袋を突出した子供の手に、破れてひらひらになつた手袋が喰ッ付いてゐた。田舎市ではあつても、今時辻占賣につけられる事も珍らしかつた。

彼女は黙つて、行過ぎようとした。子供は執拗に付いて来た。彼女は立止つて、一錢銅貨を一枚、子供の掌へ落さうとした。

「それは要りません。辻占どうぞ買うて下さい」

と、子供はまた泣き声を出した。

「さう言ふもの買ふ人ありますか」

「賣れません。誰も買うてくれません。奥さんどうぞ買うて下さい」

彼女は、妙に其の子供に親しみを感した。辻占を買ひさうな女と思ひ、自分を見込んで付いて来た子供を、可愛らしいことに思つた。事実彼女は、前途に迷うてゐたのだつ

た。思切りよく職業は捨てた。が、捨て、みると、自分の何處に見込みをつけて、結構な職業を捨て、終つたものか、自分にさへ解らなかつた。此の先何をして喰べて行かうとしてゐる自分なのか。何を自分の一生の仕事にしようとしてゐるものか。全く見當がつかなかつた。彼女は、心淋しい自分の懷を眺めて、人生の悲惨な末路を想像した。彼女は心の底で、辻占を欲しがつてゐたに違ひなかつた。辻占を眺めた後の、僅か二分間か三分間でもよい、心の安定を求めてゐたに違ひなかつた。うろんさうな淋しい姿が、辻占賣の子供の目を惹いたのであらう。

「今夜はこれで何枚目？」

彼女は子供の掌へ、五銭の白銅を落しながら訊いた。

「昨夜は一枚も。今夜は奥さんが初め」

と、子供は答へた。

今時まちなかで、こんな物を買ふ者は、恐らく自分位なものだらうと、彼女は思つた。さう思ふと、尚更、自分と言ふ者の存在が、無意義なものに見えた。彼女は子供と別れて歩き歩き、今の辻占を幾つかに折つて、帯の間に挟んだ。

家に帰ると、彼女は其夜も、机の前に坐つた。彼女は、

毎夜決つて、世間が寝静まる頃になると、其の机の前へ行つて、坐るのだつた。そして、時間には関係なしに、取止めもない空想をするのだつた。実際、彼女の空想には取止めがなかつた。何一つとして、しつかり掴んだものを持つてゐなかつた。漠然としたものを、漠然と空想に描いて、心の寂寥を慰めるだけだつた。そんな事をしてゐて、何になるのか。其の空想の中から、何時か美しい珠玉が生れて来るとでも思ふのか。今はさう言ふ事にも、望が切れてゐるのだつた。彼女は、さうして机の前に坐る時、希望と失望を、何時も同時に感じるのだつた。それでゐて、それをしないのでは、一日が暮れた氣にならないのだつた。彼女は其夜も、或る作家の「犬」と言ふ創作の事を、思出したのだつた。

其の創作と言ふのは、或る詩人が雪の日に、由緒ある古寺へ、寶物を見に行かうとした時の、出来事を書いたものだつた。出来事と言つても、極簡單だつた。飼犬に附纏はれて、追つても追つても離れない所から、詩人は腹を立て、其の犬を虐待するのだが、後で可哀さうになり、帰りには、風呂敷に包んで、ステッキに挿し、連れてゐた弟子達に擔がせると言ふ、只それだけの筋のものだつた。だ

が、彼女にとつて、それは何と言ふ恐ろしい作品だつたのであらう。

詩人は石を投げて、幾度も小犬を追ふのだつた。其の度、小犬は少しづつ、戻つて見せるのだつたが、詩人の様子を伺つては、またぼそぼそと附いて行くのだつた。

「あれは何處からお家へ来たのでしたか」

と、弟子の一人が尋ねるのだつた。すると詩人は、

「何時何處から這入つて来たものか知らない。何時の間にか自分の家へ住込んでゐた小犬だ」

と、不機嫌に答へるのだつた。

詩人は甚く神経的になり、道筋の百姓家で繩を貰つて、逐に其の小犬を縛り上げるのだつた。そして、深く雪の積つた土手を、犬の身体を横つ倒しにして、引擦つて行くのだつた。犬はどうとう、吼える事も歩く事もしなくなつた。寺の近くの茶店へ着いた時、詩人は、犬を腰掛の脚に括り付けて置いて、自分達だけ寺へ出掛けるのだつた。帰り帰り、犬が風呂敷の間から、によこによこ頭を出すのだつた。擔いでゐる弟子が「こいつ」と言つて、頭を叩くと、犬は恐れて風呂敷の中へ首を引込め、皆を笑はせるのだつた。

詩人の犬が、彼女のミスと同じテリヤ種だつた事から、彼女は此の創作を、我身に取つて感じたのだつた。彼女自身、何時頃から藝術に志したのか、どう言ふ動機からさうなつたものか知らなかつた。詩人の犬のやうに、何時何處からか、藝術の影を慕うてゐた彼女だつた。彼女が、或る新聞に、長篇小説を書いたのは、母の死ぬ年の事だつた。だが、それからの彼女には、何一つ小説らしいものが出なかつた。

彼女は、過去の長い職業生活を顧みて、世間の支配力に向つて、呼掛けてみたいと思ふ事を、幾らか持つてゐた。其の事について、彼女はよく空想した。正義的な亢奮に震える事が度々あつた。だが、書付けてみると、紙の上に浮いて出る自分の姿に、何時も愛相をつかした。闘争的で、理屈っぽくて、いやに見識張つた中年女の、自分と言ふものを、如何にも露骨に眺める氣がして、不愉快で堪らなかつた。彼女は毎日、小説を書く事と、それを引破る事を、仕事にしてゐたのだつた。彼女の友人のK子が「大体あなたは憶病過ぎる。東京では、あなたよりずっと駄目な人も、あなたよりもっと勇敢に活動してゐる」と言つて、勵すのだつた。妹は妹で「自分は働きに出るから、あなたは

安心して、精進なさい。あなたは何も出来ない人ではない」と言つて、勢をつけるのだつた。だが、此の頃では、彼女達も、彼女の仕事については、何も言はなくなつたのだつた。どう言ふ物を読んでゐるのかとも、何か出来るかとも、彼女の生活を、毎日目の前に見てゐる妹でさへ、それに關した事は、忘れたやうに言はなくなつたのだつた。彼女達の口の閉ぢる事が、彼女の苦惱を、正比例的に増させる事だつた。自分には素質がない。紙の上に現はれる通りの、不愉快な自分なのだ。自分のやうな者の描く空想から、珠玉が生れるなど思ふのは、我身知らずな自惚だ。自分の仕事も、此處が頂上で、これ以上何にも出来ない自分なのだ。彼女はしみじみさう思ふのだつた。さう思ひながら、ぼそぼそと詩人の後について行く小犬のやうに、彼女は彼女の、取止めもない空想から離れられないのだつた。苦しんで苦しみ抜いた揚句には、逐つに吼こえる事も、歩く事さへも出来なくなる自分であるやうな氣がするのだつた。殊に、其の創作の終りが、彼女の心に、じりじりと剝むられるやうな、恐怖を感じさせたのだつた。苦しみの爲に逐つに斃なれた、自分と言ふ落伍者の、葬儀の場面を見るやうな悲哀だつた。風呂敷に包まれ、ステツキで擔がれて、火葬場

へ運ばれて行く、自分の末路だつた。哀れな其の末路にも、尚執着を感じて、幽靈のやうに、によこによこ首を出し「こいつ」と言つて叩かれてゐる、皮肉な場面だつた。それ程の恥を感じながら、尚見切をつける事の出来ない自分は、氣が狂うてゐるのではあるまいか。彼女は其の晩も、さう言ふ事を思ひ、何時迄も机の前に坐つてゐたのだつた。さうして、電燈が消え、白んだ春日山の空を、一しきり窓から眺めて、寢床へ這入つたのだつた。

寢巻と着換へようとして、帯を解いた時、宵に買った辻占が、彼女の足許へ落ちたのだつた。好奇心から開いてみた。

「北風の吹初むる頃、西の方からよき便りあり」として、其の次に、

「長女の身に危害加はることあり、注意すべし」としてあつた。

北の風が吹いて、西の方から良き便りありは皮肉だと思ひ、彼女は苦笑した。自分のやうな者に、よき便りを齎もたらす客は、どうせ拗こねた風向きからでなければ、来る氣遣ひがない氣がして、可笑しかつた。

其の時、ミスが目を覺して、彼女の寢床から匍は出して

来、のつそりと頭を上げた。そして、彼女の顔を見た。

ミスは毎夜、彼女の寢床に、彼女と一緒に眠るのだった。彼女が起きる時、ミスも決つと起き、寢床の何處からか、頭を突出して来て、それも決つたやうに、一度決つと、彼女の顔を見るのだつた。寢床へ這入つても、寢付かれなくて、起きてまた机の前に坐るやうな時でも、ミスは一度は決つと、彼女に付いて起きるのだつた。そして、眠りに倦きても、彼女の起きる迄は、黙つて引込んでゐた。小用などで、一旦は階下へ降りる事があつても、彼女が寢床を離れない間は、直ぐまた上つて来るのだつた。

着換へが済み、小用の爲に、彼女は階下へ降りた。上つて行くと、ミスは階段の上から、覗込むやうにして、彼女を待つてゐた。

「おねんね、おねんね」

と、彼女は言つた。

ミスは、二三度尾を振り、彼女に付いて来た。

彼女は寢床に這入り、枕を引寄せた。するとミスは、彼女の枕許で、毛をふるひ、前脚と後脚を代りばんこに伸びをして、彼女の胸先へ、鼻を突込んだ。掛蒲團を持上げてやると、ミスは匍込み、彼女の腹に靠れ懸つて、坐り込ん

だ。其の事も、毎夜変りなく繰返されてゐる、ミスの動作だつた。それから、彼女に頭を撫で、貰ひながら、また眠りに沈んで行くミスだつた。何時頃寢床へ這入つたか。何時迄起きて坐つてゐたか、毎夜々々の彼女の動靜を、誰よりもよく知つてゐるのはミスだと、彼女は何時も思つた。ミスだけは、自分の心の中を、何もかも知抜いてゐる氣がするのだつた。「忠実な私の娘」そんな氣がするのだつた。彼女は、今讀んだ辻占の事から、若しミスが、怪我でもするやうな事があつたらなどと思ひ、感傷的な氣持にさせられたことだつた。

三

彼女は母の回想から、ふつと「長女の身に危害加はる事あるべし」としてあつた、其の時の辻占の文句を思出した。そして、ミスの今度の病氣とが、頭の中で結着いた。偶然にも、約束事らしい符合に、一寸変な氣がした。それは別として、長女と言ふ言葉が、皮肉な事に思はれ、何か恐ろしい氣がした。生きると言ふ事は、これ程眞剣な約束事なのだらうか。過去にして来た事、現在、今してゐる事など思出され、これから先の自分が、思ひやられる氣がし

た。

ミスは、夜通しさうであつたやうに、衰へた目を力なく閉ぢ、暫くうつらうつらすると、また微かに開いて、彼女の顔を見るのだつた。長い時間を續けて、無理一つ言ふでもなければ、起きてどうしようとするでもなく、瀬戸物の置物のやうに、四つ脚を折つて坐つた儘々、病苦に堪へてゐるのだつた。

ミスは、数へ歳四つになつた許りだつた。土に飼はれてゐる犬なら、長生もので二十年、普通七八年は生きるのだつた。人間と同じ物を喰ひ、人間と同じ疊の上に住み、夜になると、蒲團の中に寝て、胃拡張を病んだり、風邪をひいたり、肺炎に罹つたり、若し今死んだなら、ミスとしては、彼女に縮められた壽命だと思はれた。実は彼女は、それを氣に懸けてゐたのだつた。ミスの身体が、脂肪的にだんだん太り出した時から、其の運動不足に、彼女が氣が付いてゐた。目に見えて、毛が抜けるやうになつた事をも、知らないわけはなかつた。今の内に何とかしてやらなければ、ミスの壽命は持たないのではないかと、時々思つたことだつた。ミスは彼女を、理解のある主人だと、思つてゐたであらうか。自分と言ふ四つ脚ものを、逐に野良に飼放

さうとしなかつた主人を、心の何處かで恨んでゐたのではあるまいか。だが、長い時間を通して、ミスはそれらしい振りをも、彼女の心へ映さうとはしなかつたのだつた。絶えず目を開いて、彼女の顔を眺める事はするのだが、彼女の姿を傍に認めると、安心したかのやうに、またうつらうつらして行くのだつた。其の様子は、何か悟りを持つて、病に堪へてゐる、聖者の面影を偲ばせる程だつた。土に住む犬でも其の通りなのだらうか。ミスは矢張り、人間と同じ物を喰ひ、疊の上に住んで、命を懸けても主人を守護する道徳きり知らない、馴致されたテリヤだと言ふ氣がした。感情的で意地つ張りで、他人に馴れ親しむ心の薄いところ、已に短命であるやうに生れついてゐるのだとも思つた。さう思ふと、ミスと言ふ生命が、何か不慥に思はれた。

妹が目を覚まし、夢でも見たやうに、ぷいと上体だけ起した。そして、一寸の間居眠るやうな事をして、

「あ、あ、ちつとも知らずに眠つちやつた」と、寝ぼけた声で、独言のやうに言つた。

「ずつと楽になつたやうぢやありません？」

「息遣ひは斯うだけど、目の色が甚く悪いのよ」

妹はミスの傍に来て、頭を撫で、やりながら、「ミツちゃん。ごめんね。朝までよく斯うしてゐてくれたわね」

と言つて、其の頬に自分の頬を擦付けた。

ミスは目をつぶつて、また開いた。僅かに動かしてゐるミスの尾を、毛布の中に見る氣がした。さう言ふ場合の人間の素振りを、ミスはよく読取るのだつた。

妹は、先刻彼女の開け残した戸を皆開け、北窓の戸も開けた。一時間程前、あれ程華かな意氣込みを見せてゐた空に、もうまた灰色の雲が流れて、今日も山国らしい陰鬱を感じさせた。

彼女は、続け様な疲労から、軽い頭痛を感じながら、ミスの湿布を取換へた。毛布の中に、ミスの顔だけ見えてゐると、それ程にも感じないし、二時間置きに湿布を取換へてゐた夜中にも、それ程さし迫つて感じなかつたのだつたが、身体を抱上げてみて、彼女は落膽がつかりした。一晚と言ふ時間を通してみて、腹も腰も、殺がれたやうに肉が落ちてゐるのだつた。

「おしつこは？」

彼女がミスに言つた。ミスは前脚を突張り、階段の方を

眺めて、立上りかけた。ミスは彼女の、簡単な言葉は聞かせるのだつた。彼女はミスを抱いて降り、表の庭へ連出した。すると定らない足取で、何時もの躑躅の傍道行き、用を加した。戻つて来るのを待つて、彼女は抱上げようとした。ミスは拒むやうに、少し後退りをした。また抱きに行くと、また少し下つた。

「ば、はいいの。今日はもういいの」

ミスは、彼女の顔を見詰めてはゐた。が、抱かれようとはしなかつた。彼女は傍の雑巾を取り、一本の前脚にだけ一寸觸ふへて、拭く眞似をした。それで氣が済んだらしく、抱かれて来た。世間の唾者は、斯うして育てられ、唾者の母は、何時も斯う言ふ時に、涙を霽あすのだらうか。ミスは、土を踏んだ時には、此處で脚を拭かなければ、上られないものと、思込んでゐるのだつた。

ミスは平生、彼女の行く處へは、何處へでも付いて行きながら、が、「番」と言ふと、玄関先迄は来て、其處で踏止つて、見送る事きりしなかつた。ミスは、どう言ふ場合にも、主人の命令に、絶体服従する事きり、最上の道徳を知らないのだつた。感心な事には、穢い物を、彼女達の目に觸れる處に、晒した事のないことだつた。甚く天氣

の悪い時と、夜中の小用だけは、此の庭で足させる事にしてゐるのだつたが、さうでない時には、板塀を潜つて、植物園まで出なければ、足せないものと思つてゐるらしかつた。牝なのでミスと呼んでゐるのだつたが、このミスをミスなど呼ぶのは可笑しいと、彼女は時々思つた。お里とかお光とか呼ぶ方が、ミスには相應しいなどと思つたこともあつた。

四

妹が階下の掃除をしてゐる間に、彼女はミスを隣の三疊へ移して置いて、二階の掃除をした。それから、妹に代つて貰つて、顔を洗ふ爲に、階下へ降りた。

裏の出口で、齒楊子を用つてゐると、一筋の鈍い光線が、隣の屋根から斜に流れて来て、一坪程の庭一杯に蔓延つてゐる黒竹の葉を、帯のやうに照した。移つて来た時には、箒草程の、細々とした竹だつた。それが年々に株を拡げて、今では、趣味を持つて植込んだものかのやうに、形をなした藪になつてゐるのだつた。陽の光に誘はれて、彼女は空を見上げた。雪催しの雲が空に流れて、其の内に、ばらばらと来さうな模様だつた。口を嗽いでから見る

と、今の光線は、もうまた消えてゐた。建物の陰の、何處か雲の継目から、一寸覗いた光らしかつた。冬が過ぎて、早く夏が来るとよいと彼女は思つた。夏の午后が来ると、二階の掛出しへバケツを持つて上り、此の竹の梢へ向けて、水を振掛ける事が出来るのだつた。其の後の二三十分間の涼味は、世間にも餘りなさうに思はれた。もう一つ、此の藪の陰に鹽を持たんで、行水出来る事だつた。彼女は、金を掛けた避暑旅行もした事がなければ、風呂と言へば、人込みに蒸返つた銭湯さう知らないのだつた。が、短い間にもせよ、夏だけは、此の家に住んで、せめて生甲斐を感じる時間を、持ち得るのだつた。三月のお水取まで、しかし、雪雲の消える迄、未だ一息あると思ふと、心は滅入つた。

彼女はミスの傍に戻つて、吸入器の吸口を轉すことを、また続けてゐた。玄関に男の声がして、医者 came たらしい風だつた。間もなく、妹が医者を案内して上つて来た。彼は縣廳で技手を勤めてゐるのだつた。

彼女の出した坐蒲團に医者は坐り、前夜からの病状を彼女から聞き聞き、ミスの顔を眺めてゐた。ミスも不安さう

に見返してゐるが、声にも行動にも敵意を示さなかつた。健康な時だと、慣れない客には、こちらで氣兼ねな程、声を上げて威勢を示すのだつた。

「あれから注射なさいましたか」と、医者が訊いた。

「折角でございましてけれど、自分ではどうも不安な氣がいたしましたので」

言ひ言ひ彼女は、注射器と其の薬などのはいつてゐる盆を引寄せた。

医者は鞆から聴診器を出し、長いこと懸つて、ミス胸を診た。それから、瞼を開いて見、舌をも見ようとした。ミスは齒を喰締つてゐて、口を開けようとしなかつた。夜通し其の通りで、水を入れてやる時だけ、少し開けるだけだと、彼女は言つた。

「この種類のものは、却々忍耐力が強いから」と、医者は言ひ、苦しいのだらうと話した。

医者は用意をして、三本目の注射をした。「今日は左の方にもラツセルが聞えますよ」と、言難くさうに言ひ、

「この病氣は実に急激に進みますから」

と附添へた。

愈々さうか、と、彼女は思つた。

医者は、急な用が起つたら、衛生課へ電話をかけるやうにと言ひ、午後帰りがけにまた寄るからと言つて、帰つて行つた。

五

妹が代つて吸入をさせてゐる傍で、列べた坐蒲團の上に、彼女は横になつてゐた。ミスと暮して来た過去の生活が、色々と思出された。

ミスに思を懸け、度々呼出しに來た近所の不良犬の事が思出された。驢馬程もある牡犬だつた。それが來ると、ミスは腹を立て、例の痲癩を起すのだつた。平生はそれ程でもないのだつたが、時期に這入ると、人間同様多少病的になるらしかつた。脊中の毛を逆立て、尻尾を股の間に挟むやうに下げ、牙をむき出して唸る時のミスは、野獸のやうに凄かつた。向ふ意氣が強くと、さう言ふ時には、彼女も取抑へる事が出来ないのだつた。

ミスの神経質なのに比べて、近所のは、小面憎い程、のそりのそりしてゐた。失望して帰る時、向ふは決つたやう

に、門の柱か、傍の朝鮮南天の枝に無作法をして、其の辺をべたべたにし、時にはもつと穢い物を、うんと盛上げて置いて、悠々と露路を出て行くのだつた。

「同情も何もあつたもんぢやない」

と言ひ乍ら、妹はよく箒と塵取を持廻つてゐたことだつた。

からりと晴れた日、ミスは二階の掛出しへ出て、山を眺め、當なしに一人で吼えてゐる事が時々あつた。さう言ふ時に出すミスの声は、金属を打合すやうな、響きのある高音だつた。眺めてゐて、自分の声を弄んでゐるかのやうな様子が、歌を楽しんでゐる若い女性を偲ばせるのだつた。ミスは音楽が解る？それは彼女の、勝手な想像ではあらう。が、彼女が口笛を吹いたり、唄をうたつたりする時、ミスはふつと、耳に止めた風をすることがあるのだつた。蓄音機で試してみた事もあつた。同じ音色が続いてゐる間には、それをしないのだが、音色が変わると、キユツと首を曲げ、聴訂す風をするのだつた。四音位の隔りだと、微妙にでも感別するらしい風だつた。さう言ふ事に就て、誰かに訊いてみたいと思ひ、人に話してみた事もあつたが、今では、其の事をも表情の一つとして、見過してゐるのだつ

た。

「一寸」

と言つて、妹が彼女の注意を惹いた。

「ほら、混つて来たやうよ、ね」

妹はミスの息遣ひを見ながら、不安さうに言つた。

呼吸が早くても、浅く萬遍なく続いてゐる間は、安心してゐていいが、時々、大きく突く息が混つて来ると危険だと、医者が注意してゐたのだつた。

「ほら」

と、妹がまた言つた。彼女は頷いた。

刻々に肺の働きが弱り、さうしないのでは炭酸瓦斯のために窒息する所まで、逐つに來て終つたのだと、彼女は思つた。

彼女は起上つて、吸入器のねちを少し緩め、酸素を餘計に出すやうにした。

「ミツちゃん、よくなつてね。遠いお國へ行つたりしちゃう目よ」

妹はおろおろした声で言つた。

ミスの呼吸異常は、暫くで止つた。彼女はまた少しねぢを緩めて、咽のどばせない程度に、酸素を餘計出した。此處ま

で来て終へば、どうせ助からない命だと思つた。壽命としては短いに違ひなかつた。が、育てられて大人になり、子供を産んで、それを育て、其の上主人に対してこゝ迄の事が出来たのだから、ミスとしては、これ以上の仕事はなかつた。完全に仕事を果して、死んで行くミスの生命だつた。苦しい思をさせないで、自然に自然に、段々に細くなり、何時とも解らない間に、消えさせてやりたいものだと思つた。

暫くすると、ミスはおちおち眠りさうにした。

六

晝過ぎに、一寸また軽い異状が来た。彼女達は代り合つて、目を離さずに介抱してゐた。其の時、入口の格子の開く音がして、暫くして、女の声が聞えた。彼女は降りて行つた。玄関の土間に、黒っぽい洋装をした女が、立つてゐた。

「暫く」

向ふから声を掛けた。m子だつた。

m子は東京にゐて、社会運動に関係してゐるのだつた。甚い貧乏で、何時か季節に合つた身装りなどして来た事が

ないのでつた。洋服にしたいとはかねがね話してゐた事だつたが、愈々m子にも時節が来たやうだと、彼女は思つた。

「すつかり身に着いてらつしやいますよ」

と、彼女は言つた。

「さうですつてね。やつと最近」

m子は、雨用意の蝙蝠傘を、土間の柱に靠せ掛けながら、

「あなた少しお寢れになつたやうね。どこかお悪いんぢやありませんか？」

と言つた。

「私ぢやないんですけど」

「御病人？」

言ひ言ひ、m子は靴を脱いだ。

「今日はさうゆつくりとはしてられないんですけど」
と、m子が言つた。

階段を上り上り、

「何時関西へ」

と、彼女は言つた。

「大阪へは二三日前に来たんですけど、東京を出てから一

寸二週間程になるのよ」

「……………」

「四國の高知から九州の福岡辺をずっと歩いてね」

m子は、上りたての三疊で、外套と帽子を脱いで、折靴と一緒に置き、しで紐で括つた紙包みだけ持つて、次の部屋へ這入らうとした。敷居を跨ぎかけた處で、

「まあ、ここのお家は」

と言つて、m子は立止つた。そして腰を折り、脛で上り込むやうな恰好をして、妹とお辞儀を仕合つた。

「酸素吸入？まるで童話劇にでもありさうな場面ですね」

m子は、脛で歩いて暖爐の近くへ行き、坐つた。

「どうしましたの」

「風邪が高つて肺炎を起したんですの」

「矢張り。大阪では人間のが大分流行つてますよ」

「さうらしいですね。何しろこの寒さですもの」

m子は妹の顔を見て、

「これは親の方でしたっけ？」

と訊いた。

「子供の方は？」

「知合のお家で隔離させて頂いてますの」

「道理で。這入つて来た時、どうして犬が鳴かないのかと思ひましたわ」

「……………」

「おや、カナリヤも鳴いてら」

「……………」

「大阪の街中を馳廻つて此處に來ると、まるで世界が違つたやうな感じね」

「……………」

「さう、ぢや犬達にと思つて餡パンを買つて來たんですけど」

m子はミスの方を眺め、

「其の様子ぢや駄目ね」

と、ミスに言つた。

彼女はm子から、土産など貰ふのも初めてだつた。

暫く間を置いて、

「実は今日あなたを引張り出しに來たのよ」

と、m子が彼女に言つた。

「あなた私と一緒に兵庫へ講演に行つて下さらないこと？

明後日の晩ですの」

「随分忙しさうにしてらつしやる御様子ね」

「さうなのよ。産兒制限の運動でね」

「さう言ふ所へ私が顔を出しても、仕方がないでせう」

「どうして？」

「――」

「人口問題からでも、経済問題からでも、母体保護の意味からでも、どう言ふ意味からでも話していただいでいいのよ」

「――」

「対手は主に労働者の内儀さん達ですからね、うんと調子を下げて話せばいいんだし。どう？行つて下さらないこと？」

「――」

「厭？」

「折角ですけれども」

「関西には講演の出来るやうな人が少くつてね」

「私だつて同じですよ」

「勿体振るもんぢやないことよ。いくらも経験を持つてらつしやる癖に」

「――」

「あなたの情熱と、その熱辯だけで結構。材料が心配だつ

たら私が差上げてもよございます」

「でも」

「いいぢやありませんか。講演料も幾分差上げられてよ」

「――」

「駄目？」

「ええ、折角ですけれども」

話が切れ、暫く経つた。

「あなた一体この先どうして行くお積り？」

と、m子が言出した。m子がさう言ふ話をするのは、此の時だけではなかつた。逢ふ度、何時もさう言つて、彼女を勵ますのだつた。

「ぐずぐずしてゐちやいけない」とか「出来ない出来ないつて、何時までぐずつてゐる積りか」とか言つて、我事のやうに口惜しがつたりするのだつた。

「大体高い所を望み過ぎてらつしやるのぢやありませんの。人間の生活には無関係なところの」

と、m子は言出した。彼女は黙つてゐた。

「今はさう言ふ時代ぢやないことよ」

「――」

「F子さん御覧よ。理想ばつかり追つてらつしやるもんだ

から、今時どの雑誌社からも相手になつて貰へないぢやありませんか。其の莫私なんか、常識運動家だなんて悪口する人があるやうだけど、でも社会的にはこれで命が繋げて行けるから不思議だわ。」

「――」
「仕事する者にとつて、世間から見失はれる事程、悲哀な事はないわよ、ほんとに」

また暫く話が切れた。

「新聞で雑誌の広告を見る度、どれかにあなたの名が出てゐないか、もう出さうなものだと思つて、どんなに丹念に眺めることか」

と、m子が言つた。

「あなたがそんなにしてらつしやると、私だつて實際肩身が狭いわよ」

「そんな事人から聞かされる度に、これではならぬならぬと始終思ふんですけど、それは皆さんが私を買冠つていらつしやるので、本當は何も出来る私ぢやありません」

と、彼女は言つた。彼女は人の前で、口に出してそれ程自分を投出した事を言つたことがなかつた。彼女は悲鳴を上げる事を好まなかつた。負惜しみからでもあるし、大体人

には陽氣な所を見せてゐたい性だつた。とうとう自分も、斯う言ふ事を口に出すやうになつたのかと思ひ、涙ぐましい感じがした。

m子は折返すやうに、

「馬鹿な事を仰言るもんぢやありません。あなたの中には、萌えるやうな情熱と、どれ程の苦勞にでも打勝てる根氣を持つてらつしやる事が、この私にちゃんと見えてるんですもの。而もその歳で。」

と、言つた。

「空つばな情熱や根氣は、いつそう無い方が禍しません。」
と、彼女は独言のやうに言つた。

「どうしてまたそんな情ない事を仰言るの」

「――」

「兎に角にもあの小説がお書けになつた事は事実だし、千人からの人に二時間も黙つて聞かせるだけのお話が出来た事も事実だし、それに私なんかとは違つて、職業に就て支配階級の前に勇敢に闘つて来た歴史も持つてらつしやるんだし。出来ないあなたぢやないことよ。そんな事を聞くと、あたし悲しくなる」

「――」

「大体こんな所に何時迄も引込んでらつしやるからですよ」

「あなたの環境がいけないですよ」

「お友達もだし、此の土地もだし、それに第一犬など飼つて此の家もだし」

「言過ぎるかも知れないけど、本當に此の頃のあなたには呆れる。度々原稿をお願いしたつて（m子は小さいながら機関雑誌を持つてゐるのだつた）只の一度も書いて下さるんでもなければ、斯うしてわざわざ引張り出しに來たつて、此の通りな事です。ねえ貞子さん」

m子は妹の名を呼んで、同意を求めるやうに、其方を見た。妹はミスに吸入をさせながら、身体で返事するやうに、一寸動いて見せた。が、頭も上げなかつたし、声を出して返事もしなかつた。妹が泣いてゐる事に、彼女は先刻から氣が付いてゐたのだつた。

「妹さんにしたつて、あなたがさうしてらつしやる事を、決して喜んでやしないことよ」

「だから兎に角行きましょ。行つて頂戴。あなたが行つて下さると、私も心丈夫ではあるし」

「ね、さうして頂戴」

「折角ですけれども、御免蒙つておきます」

「どうして？」

「演説をすると後が淋マしんですもの」

「愉快が残つた事がないんですもの」

「誰だつて同じことよ。そんなに自信を持つて饒舌てる人なんてあるもんですか」

「勇氣ですわ。とにかく勇氣ですわ」

「こんな事してたら、結局埋れて腐つちやふより道がないぢやありませんか」

m子はもつと何か言ひさうな意氣込みだつた。

「失礼ですけど、今日はミスも斯んな風ですし、其のお話ここで打切つて下さらないことよ」

と、彼女は言つた。

「何時かまたゆつくり聞かしていただきますから」

と、言つた。

m子はほつとしたやうな表情をして、

「ほんとにね、御免なさい。今日は本當にいけませんでしたね」

と言つた。暫くしてまた、

「出過ぎた事を言つたりして、本當に御免なさいね」と言つた。

七

茶でも入れようと思ひ、湯を沸かす爲に、彼女は階下に降りた。用意が出来、持つて上つて行くと、m子が何事かを話して、妹を笑はせてゐた。茶を入れ入れ聞いてゐると、産兒制限の事で失敗した、或る女の話をしてゐるのだつた。

茶を呑みながらm子が、

「普通用はれてゐるのは×××でしてね」

と、言出した。そして、面白さうにだんだん話を進め、

「要領さへ解れば、訳のないことよ」と、言つた。

「だけど、どう言つたところが血を見るだけで慄ひ上る私の性なのでね」

「本氣にかゝる積りなら、これ位ポロイ金儲けはないんですけど」

「私の知つてるお医者なんか、そりや要領のいい事をやるらしいわよ。客の様子を見れば、そんな事直ぐ解りますものね」

「困る人があつたら、何時でも紹介してあげてよ。ほんとよ」

話を聞き聞き、彼女は、取纏つたm子の洋服姿をつくづく眺めた。そして、心の底で不愉快を感じてゐる自分を、負惜しみな奴だと思つた。

彼女の友達の中で、今に尚彼女を見捨てないのは、恐らくm子だけだつた。m子も言つてゐる通り、何時か一度書いた事もない原稿を、忘れ頃忘れ頃に、頼んで来るのもm子だつた。無論、彼女の原稿が出たからと言つて、m子の雑誌の名譽になる筈はなかつた。むしろ、邪魔になる位の

ことだつた。それでも今日まで、見くびつた顔一度見せなかつたm子だつた。「××社の某氏とは昵懇にしてゐるから、出来たら何時でも賣付けて上げませうね」とか「とにかく一度読ましてみなさい」とか、却つてこちらで腹が立つ程、熱心に勵してくれたのもm子だつた。だが、世の中はどうして斯う淋しいのだらうか。貧乏と言つても、自分のは、m子のに比べてまだまだ遠いのだと言ふ氣もした。本當に貧乏の底に落込み、十幾年と言ふ長い間、明けても暮れてもパンの労苦に悩まされてみたなら、自分もあゝ言ふ事を、眞面目に人に話すやうになるかも知れない氣がした。苦勞が足りない。本當はさうかも知れないと、彼女は思つた。彼女は、自分の立場とm子の立場を置換へて考へてみた。貧乏な癖に氣位許り高く、有る時は有るやうに費果して終つて、何時迄もじめじめしてゐる自分は、最後に當然自殺するより道がない氣がした。遂に吼える事も歩く事も出来なくなつて、風呂敷に包まれて火葬場へ運ばれて行く自分！いかにもさうなりさうな氣がした。

m子は机の上の時計を見、

「おや、もう四時ねえ」

と言つた。そして、立つて北窓の傍へ行き、障子を少し開

けて、外を眺めたりした。

窓の方へ向けて置いてある机の上を、m子は眺めながら、

「あなたコロンタイの小説お読みになつて？」

と言つた。

「いゝえ読みません」

と、彼女は答へた。

「そりや一寸遅いわね」

「——」

「是非一度お読みなさいね。已に実行的に流行つて、よ

と、m子が言つた。

彼女が、手文庫の上に、手袋を置いてあつた。m子はそれを見付けて、取上げ、

「あなたこれ何處でお買ひになつて？」

と、言つた。

「何處で買つたのでせうか。従弟に貰つたんですの」

「大阪ぢやないわね。大阪つて本當にければした物きりない所ね。此の間うち手袋を欲しくつて、随分探したけど」

m子も急に趣味的な事を言ふやうになつたものだと、彼

女は思つた。

m子は、其の手袋を自身の手に嵌めてみ、透すやうにして眺めてゐた。そして、

「あなたこれ私に貸して下さらないこと？」
と言つた。

八

午后また訪ねて来た医者と入れ違ひに、m子は帰つて行つた。玄関先で、先刻の手袋を嵌め、

「さあ、これで揃つた」と、言つた。

医者が帰つた後で、妹が、

「m子さん随分お変りになつたのね」と言つた。

「其の事はもう言はないで頂戴」

と、彼女は不機嫌に言つた。

「この上意見がましい事を言はれると堪らない」

「い、え、さう言ふ意味でぢやなくて」

「どう言ふ意味でも。これでもう沢山」

暫くして、妹は夕飯の仕度の爲に、階下へ降りて行つ

た。

彼女が代つて、ミスに吸入をさせながら、ミスに言つた。

「ミス、今先刻お前の命に見切りをつけて帰つてつたお医者のお話を、お前は聞いたでせう。お前の命は、今晚限りだとお医者は言つたわね。お前安心して死んでお行きよ。お前が今度行くお國には、私のお母さんがいらつしやるの。多分今頃はお前を迎へるために、途中迄お出掛けになつてらつしやるかも知れない。お前が向ふへ行つたら、私の事をよくお母さまに申上げて、これからは二人して、此の私の心を見護つておくれね。これからの私は、今迄よりもつともつと淋しくなるでせう。でも私は、あの通り机の前で空想する仕事を止める事をしない。淋しければ淋しい程、尚私は空想します。逐ツに歩く事も吼える事も出来なくなる迄、私は此のペンと此の原稿紙を離す事をしません。私は、此の仕事に選ばれた、得意な人ではない。この私こそは、此の仕事をしなければ生きて行かれない淋しい淋しい人間なの。ミス！解るかい。私のこの寂しさが、お前に解るかい。お前だけは、何もかも知つてゐてくれるでせうね」

九

夕飯前から、ミスの呼吸異常は、だんだん激しくなつた。いよいよか、と、彼女は思つた。

「済まないけど、臘燭を少し買つて来てくれない？」

今ついた許りの、電燈を眺めて、彼女が妹に言つた。

「ミスとも愈々別れらしいから、今夜は電燈を消して臘燭にしましよ」

と、言つた。妹は返事をしなかつた。そして暫くして、

「そんな氣味の悪い事、私は厭」

と言つた。

「厭だつたらあなたは階下にいらつしやい。私は臘燭の火を見たい。そして泣きたい。今夜はもうとこぎり泣く」

と、彼女は言つた。

暫く経つた。妹が、

「ぢや買つて来ますから、あたしの頼みも聞入れて下さる？」

と言つた。

「一寸だけでいいから、チルに逢はしてやつて下さる？」と言つた。

妹がよい所に氣が付いたと、彼女は思つた。曾て他人の家で寝泊りした事もなければ、他家では、貰つたものでも喰べようとしないうる心なチルだつた。預つた方でも困つてゐる事だらうし、チルも淋しくしてゐようと思つた。

妹が出て行つた後で、ミスは小用らしい様子をして見せた。それ程になつてゐても、ミスの意識は明瞭なのだつた。この種類のもものは、斃れる眞際までさうだと、医者が話してゐたことだつた。彼女は抱いて降し、表の庭へ出してやつた。ミスはもう歩く事が出来なかつた。降された其の場所に、降された其儘々の恰好で、用を足した。彼女はミスの傍に蹲り、玄關の電燈の明りを脊に受けながら、ミスの小水の色が、血のやうである事を想像した。熱はそれ程高くないのだつたが、芯の底が燃えてゐて、絶えず水を欲しがつてゐるのだつた。用が済むと、規り通り縁先で雑巾を見せ、抱いて上つた。

ミスは寢床に返ると、身体中を慄はせて、苦しがり始めた。今の動揺が、甚く応へたらしかつた。息苦しい呼吸が暫く続くと、堪へられなくなつたと見えて、口を開き舌を出して、今にも息の切れさうな息遣ひを始めた。

彼女はミスの身体を、毛布の外から抱込むやうにしてゐ

た。口を開けた！ミスはとうとう口を開けた！彼女は、どうかして楽にしてやりたいと思つた。刻々に迫る命の最後を、訴へられる氣がして、うろろうした。が、吸入器の吸口を、近くへ近くへと差向ける事と、スポイトで口の中へ水を落してやる事きり、方法が見出せなかつた。

暫くすると、ミスの口はまただんだんに閉つた。そして元の通りに落着いた。落着いたと言つても、已に七つ目九つ目毎に、突く息を混ぜる處まで、ミスは来てゐるのだつた。それが、だんだんに五つ目七つ目になり、三つ目二つ目になり、最後は炭酸瓦斯の爲に、窒息して斃れる事になるのだつた。其事を医者から聞いた時、それ程の最後を見せる位なら、いつそモルヒネ注射でもして貰つて、其の苦しみから逃れさせてやらうかと、彼女は考へてみたことだつた。

一時間程して、妹が歸つて来た。何事かをチルに言聞かせ乍ら、脚を拭いてゐる氣配が聞えた。今ここへ、何時もの元氣で跳込んで来られては困ると思ひ、妹に声を掛けようとしてゐる間に、チルはもう階段を馳上つて来た。そして、襖の外から、キャンと言ふ呼び声をかけた。彼女はわざと聞けずにゐた。妹が上つて来て、

「お母ちゃんねえよ。解つてる？ 静かにするのよ」と、襖の外で言聞かせてゐた。

どう解つたものか、チルは直ぐには部屋へ這入らうとしなかつた。敷居越しに、そうつと首を突出し、怖けた振りをして彼女の顔を眺めてゐた。こちらの緊張振りが目に映る時、ミスもチルも、よくさう言ふ態度をとるのだつた。

「い、の、い、の」

彼女は手を出して、軽く愛相した。

チルは室へ這入る事はしないのだが、身体を波のやうに揺動かし、短く切つた尾を、震へてゐるやうに振立て、前脚で疊を叩いた。チルの心に溢れてゐる感激を、直に眺める氣がし、彼女は大きく手を出してあやした。チルは、彼女の膝へ跳懸つて来た。其の勢に倒されか、つた身体を、彼女は手を突張つて支へた。

「お母ちゃん、ほら、お母ちゃん」

彼女はミスの方を示し示し、声を落して言つた。静ませたい時に、さう言ふ言ひ方をすると、こちらの心をよく読取るのだつた。

チルはミスの方を見た。そして、恐る恐る其方へ首を突出して、鼻嗅ぎをし、少しづつ、傍へ寄つて行くのだつた。

どうするだらうかと思ひ、眺めてゐた。離れてゐて逢ふ時、何時もだと、一しきりぢやれ合はなければ落着かない二匹だつた。

チルは静かに静かに、忍び事でもするやうな恰好で、ミスの傍へ寄つて行つた。そして、高く積んだミスの蒲團の上へ、自身も上り、ミスと頭を揃へて坐り込んだ。ミスは僅かに耳朶を動かしたが、むろん、それ以上に感情を表はす氣力を持たなかつた。見てゐると、チルはミスの口の辺りから喉の裏を、懐しげに懐しげに嘗るのだつた。取交してゐる親子の感情を眺めて、彼女はとうとう本泣きに涙を落した。チルは子供だけに、平生はそれ程明瞭しないのだが、ミスは、チルが我子である事をよく知つてゐて、平生の素振りにも、その事が見えるのだつた。

チルを連れて外を歩くと、可憐だ可憐だと、眺める人はよく言つた。胴抜きで、腰の上部と尾の付き根に、整つた斑卓を持ち、四肢の伸び方、胴の締り方など、ミスと比べて、西洋の女と日本の女程違つてゐた。むろん、牡と牝の異ひはあつたが。彼女は平生、チルにはミス程に親しまなかつた。何故と言ふ理由はなかつた。妹がチル最良なので、自然にさうなつてゐたのだつた。チルと言ふ名前も、

初め彼女の方でチビと呼んでゐたのだつたが、何時の間にか、妹がさう呼替へてゐたものだつた。

チルは、じつとミスの傍に坐込んでゐて、離れようとしなかつた。さうさせて置く事は、どちらの爲にもよくないと思ひ、呼取るやうにと妹に言つた。妹は呼取り、チルにカルケットをやつた。喰べないにしても、目の前でさう言ふ事をして見せるのは、罪だと思つた。彼女も一つ取つて、ミスの口の傍へ持つて行つた。ミスはうるささうな表情をして、横を向いた。

「チル」

彼女は囁くやうに呼んだ。そして、今のカルケットを半分に分けて、チルに見せた。チルは踊るやうに来て、口で受けた。後の半分をまたやつた。チルは後を請うて、彼女の手を嗅ぎに来、膝を搔いて求めた。

「お坐り」

チルは行儀よく坐つて見せた。

彼女はまた一つ取つて、半分に割り、喰べさせた。そして、残りの半分を自分の膝に乗せ、

「これはお預け」

と言つた。

チルは物欲しさうな瞳をして、彼女を見上げた。

「欲しいのか」

「……」

「ぢやお上り」

チルは其の菓子に口を添へたが、伺ふやうに一寸また彼女の顔を見上げた。

「あ、よし」

チルは直ぐ口へ入れた。

丁度其の時だった。ミスは息遣ひが、急に激しくなつた。彼女はミスの鼻の近くへ、仰向けに轉がせておいた吸口を、慌て、握つた。が、ミスは已に口を開いて起上りかけてゐた。それは、如何にも急激な物狂ひだった。彼女はミスを抱上げようとした。が、ミスは受附けないで、立つて、ざりざり舞ひを始めた。

「すつかり緩めて。其のねぢ。吸入器のねぢ」

と、彼女は夢中になつて、口走つた。

酸素は音を立て、吸口から吹いて出た。だが、其の騒ぎも、一分間とは続かなかつた。四つ脚を棒のやうに突伸ばして倒れたミスの身体に、彼女は取纏つて、何やら出任せに口走つた。

一〇

ミスとしては、それで持過ぎる程持つた壽命だったのかも知れない。此の上は、どれ程手を盡しても、取止めることの出来ない壽命だと、医者と言つてゐたことだった。が、餘りに急激に來過ぎた氣がした。若しかしたら、嫉妬の爲の亢興から、あ、言ふ事になつたのではなからうかと、彼女は思つた。ミスの目の付く所で、チルと親しんだ風をしたりすると、跳懸つて來てチルを追除け、自分が彼女の膝に上つて、如何にも我物顔に、澄し込んで見せたりするミスだった。それは、彼女の思過ぎではあらう。だが、妹が声を出して泣いたりするのを見て、彼女は妙に腹が立つた。

湯を沸して、ミスの死骸を奇麗にしてやり、買つて來た晒木綿で、身体を巻いてやり、部屋の掃除を、何時もより丁寧^{ていねい}に済ませた時、もう十二時近かつた。

ミスの毛を箒集めた塵取を持つて、階段を降り降り、しかし、これからは、部屋の中が、奇麗になる事だらうと、彼女は思つた。ミスを飼始めた當時、疊の縁に喰付いてゐ

る毛を氣にして、一々拾ひに廻つたことだつた。客と話してゐる時など、ふつと目に付いたりすると、恥しい心を露骨に見られる氣がして、顔を紅らめたりしたことだつた。何時の間にか、その毛にも慣れ、今ではうつつかり着物に喰付けて、外出する事さへあるのだつた。殊に此の頃の抜け方は甚く、毎朝、綿屑のやうに籌集めてゐた毛だつた。

終はない間にと言ひ、彼女達は連れて、銭湯へ出掛けた。何百人と言ふ人が、水を増しては汲出し汲出した残り湯だが、それ程穢れてはゐなかつた。浴り手も二三人きりなかつた。三日振りで、ゆつくり湯に浸つてゐると、うつつ眠氣がさし、三十八時間ぶつ通して、初めて疲労を感じた。

歸つてみると、チルは玄關の坐蒲團の上に、荐マドれた恰好をして、坐つてゐた。ミスの騒ぎの時、怖れて彼女の机の下へ匍ム込んでゐたチルだつた。

翌る朝、彼女は自分で材木屋へ出掛けて行つた。そして、北海松の四分板を、二枚買った。北海松は、木目が細かくて奇麗だし、柔いから、自分で細工するのにも、ミスの棺にするのにも、向きさうに思つたからだつた。彼女は、表の縁に坐込んで、晝過ぎ迄か、つて、ミスの棺を造

つた。覺束ない細工なので、板の合はし目に、そちこち隙が出来たりした。此の木は、伸縮が多いと聞いてゐたので、良く枯れたのを選つて来たのだつたが、雨水が浸込まないやうにと思ひ、隙間へ磐石糊を詰めたりした。

底と周圍に脱脂綿を敷き、ミスの死骸を入れると、甘く一杯に納つた。上から脱脂綿を掛け、全体花で埋めた。棺が出来た時、妹と連れて、心安くしてゐる花屋へ出掛け、店に出てゐる花類の中から、あれこれと、二輪三輪づつ、摘取らして貰つたものだつた。フリージャにしても、シネラリーヤにしても、温室咲の半開のものだつた。何時の頃、誰が始めた事なのか、死靈を花で埋めてみると、すつかり浪漫的な感情になつて終つた。特に念入りに匏をかけて置いた蓋をした。どう見ても、赤ん坊の寝棺だつた。前に大連にある友人から、夜具にするやうにと言つて貰つた、紅色の支那緞子があつた。それを出し、台の覆ひにもなり、棺の覆ひにもなるやうにして、彼女自身の机の上に祭つた。

夜に這入つてからは、電燈を消し、前の晩妹に買はせた臘燭に火をつけた。母に別れた時のやうな、孤獨な淋しさが、心にマド通り、しみじみ涙が落ちた。

ミスが彼女の家へ来たのは、生後三十八日目の時だった。神戸の知合から貰ったもので、鼠のやうに小さかった。足掛け四年と言へば、短い壽命には違ひなかつた。だが、大人になつて、チルを産み、育て、そのチルが已に大人になつてゐるのだつた。ミス一代！しかし、長い時間が経つてゐるのだと、彼女は思つた。(終)

【解説】

一

此の作品は、「玄林堂特撰 10×20」版、通行の400字詰原稿用紙に書かれている。同じ原稿用紙を使用した作品としては、もう一つ未発表の「彼女の犯罪」がある。「彼女の犯罪」の主人公は、寡婦の派出看護婦で、「明治二十九年八月生まれ」、現在「三十四才」とされており、ここから、この作品の執筆時期は昭和五年頃と推定される。社会に進出する職業婦人の嬰兒殺しを描いた「彼女の犯罪」は、まさに、「大学は出たけれど」が流行語になる昭和四、五年の就職難・不景気な時代、性の奔出や産児制限を抱える道徳の退廃、換言すれば価値観の転換期を背景にしたものと言える。同一の原稿用紙使用を執筆時の近接と考えれば、「淋しき

存在」の執筆時期も昭和四・五年頃と類推される。また、この「淋しき存在」執筆の動機^(モチ)については、昭和六年十二月「昭和七年二月迄の詳細な小菊「日記」の、七年二月欄外に朱書で「三年前、ミス^(ミ)を死なし、自分は「淋しき存在」を書いたのも二月であつた。(傍点筆者) 今年の二月云々」と記された文言が手がかりになる。これに従えば「淋しき存在」が昭和四年二月の飼い犬・ミスの死を素材に、昭和四年か五年頃に執筆された作品となる⁽¹⁾。さらに、本文二章にある「或る作家の「犬」と言ふ創作の事を、思出した」に該当する作品が、小菊が師事した志賀直哉の「雪の遠足」(昭和三年十月末に執筆、昭和四年一月「婦女界」に発表)であることは自明であり、「淋しき存在」がそれ以後の作であることも明らかである⁽²⁾。そして、此の「淋しき存在」を持参して教えを乞うた小菊に、志賀がどのように語つたかが、未発表草稿である「二、九輪草」⁽³⁾に次のように記されている。

「淋しき存在」に、お淳(小菊がモデル)筆者注)がそのこと(ミスの死のこと)筆者注)を書いたのであつた。(中略)

朝、夫人から電話がかつて、原稿をよんだから、出て来られたら来るようにとのことで、涼しいうちと思ひ、すぐ出かけた。

植込みに面した、南受けの明るい夫人の部屋で、批評をも

らった。

先生は持つて来た原稿を、新しい畳においた。お淳はいつものように先生と向い合せに坐る。

「横田さんが今まで書いたうちで、今度のが一番いい、」
先生がそういった。

それから、原稿を一枚々々めくりながら、鉛筆でシルシのついたところを、ていねいに批評してくれる。一年に二、三度教えられるこのときが、お淳にとって最大の緊張時間であった。

部分的な批評がすんでから、先生は指を折って、総評的に良いところをかぞえて褒めた。その中に、「簡潔」、「渾然」といった言葉があったのを、お淳は今も忘れられない。

が、先生が最後にいった。

「だが、これは、発表することを、好まないんだがね」

お淳はじつと先生の眼を見た。先生もお淳の眼をじつと見ている。

沈黙が過ぎて、お淳は解ったように、うなずいた。そして、静かに視線を植込みに逃がして茫然と外を見た。

悪いことをした！、と思う。——横田お淳はとうとう座敷飼いの小犬になった——それはS・T子という架空の人物に言わせた、擬装の言葉でなかった。ありのまゝの事実を書い

た、追いつめられた言葉だっただけに、この四年間のお淳の

生活を見て来た先生にすれば、響きがそれだけ大きかったであろう。(以下略) (四)

以下、この解説では、右における志賀の「淋しき存在」の読後感である「今まで書いたうちで、今度のが一番いい、」だが、これは、発表することを、好まない」、さらに小菊の「ありのまゝの事実を書いた、追いつめられた言葉」などの記述に着目し、当時の志賀と小菊が抱えたであろう問題点を探ってみようと思う。

二

大正十四年五月一日〜七月二十九日まで大阪・東京両「朝日新聞」に「歸る日」を連載した池田小菊が志賀直哉に接するようになるのは、翌大正十五年一月十八日、奈良女高師の講演依頼のために訪問し、それは断られたが二月四日から週二回の家庭教師をすることになってからである。当時の志賀は、「座右寶」という美術図録の編集と完成に向けて活動中だし、それが六月に完成すると、十一月からは「暗夜行路」後篇四の発表を始めて、それは断続的だが昭和三年六月まで続く。「山科の記憶」発表も大正十五年一月だし、山科ものを脚色した「邦子」が書かれたのも翌昭和二年の夏、その意味では、作家としても美術愛好家としても充実した時期の志賀に小菊は会ったことになる。小菊が家庭教師を

始めた直後の大正十五年二月十六日の志賀日記に

今自分は氣持少し動き出してゐる、此期尊重すべし、下らぬ事に煩わづらはされぬこと肝要なり 氣持積極になり創作慾も読書慾もあり 進む前兆なり 徒に過こすべからず

とあるが、そんな心境にある志賀を、小菊が記したと思われる作品がある。小説とはいえないような代物だが、大正十五年十二月号の「学習研究」という、小菊が訓導（教師）として所屬していた奈良女高師附屬で発行されていた学習雜誌に載せた「創作 愚作家の犬」という作品である。その「創作 愚作家の犬」という作品は、創作に苦慮する佐野京子という主人公が犬の飼い始めで、ジステンパーに罹つていとも知らずに飼い犬「エル」の病氣に悩まされる。そんな飼い犬の病状の心配やら、締め切りの追つた自分の創作への煩悶、さらにそんな主人公の苦悶には無頓着な同居人である姪・須磨子との間に醸される感情的な齟齬などで、神経衰弱気味になつてゐる、そんな時、知人の有名な作家S氏——文中では「S氏は有名な作家で、いろんな種類の動物を飼つた経験を持つて居り、今は小鳥が主だが、犬は三匹ばかりもある。」とされてゐる——に犬の病を問ひ、いとも簡単に解決してもらつた後に、犬を連れてS氏を訪ねて、作家を労る妻の態度や家庭に自分の理想郷をみるというような小品である。此の有名な作家S氏とは、紛れもなく小菊が入りする志賀直哉のことだ

し、志賀を理想化して描く小菊の視線に偽りはないだろう。勿論、「学習研究」という教育雜誌への発表ということを考慮すれば、例えば、有名作家というものはそれだけの実質をもつたものであると読者に示す必要があつたかも知れないし、また、「学習研究」の身近な読者が、志賀と「歸る日」の作者・小菊の私的な関係も知悉してゐたであろうことを考慮すると、そういう期待に応える師弟関係を示す意図も否定はできないかも知れないが、「創作 愚作家の犬」で理想化されたS氏、即ち志賀を見る小菊の眼は、不自然ではない。

そして面白いのは、此処でジステンパーに罹る「エル」という小犬が、作中では、癩癪持ちの牝犬で、生後百日足らずとしてあるが、その年齢を勘案すると「淋しき存在」で死ぬ「ミス」に該当するのである。「淋しき存在」の末尾に

ミスが彼女の家へ来たのは、生後三十八日目の時だつた。神戸の知合から貰つたもので、鼠のやうに小さかつた。足掛け四年と言へば、短い壽命には違ひなかつた。だが、大人になつて、チルを産み、育て、そのチルが已に大人になつてゐるのだつた。ミス一代！しかし、長い時間が経つてゐるのだと、彼女は思つた。

とあるが、「創作 愚作家の犬」の執筆時が「二五、一〇、三一」と記されてゐることからすれば、「生後三十八日目」に貰つた犬

がジステンパーに罹ったのが「生後百日足らず」、そして「足掛け四年」の昭和四年二月に死んだことになる。とすれば、小菊は志賀家に入入りするようになった大正十五年夏には飼い犬を始めたことになり、それは恐らく尊敬する志賀の影響であり、師の生活を模倣した生活実態でもあった。「淋しき存在」には、カナリアを飼っている様子も書かれているが、それも「創作 愚作家の犬」のS氏、志賀の影響だったろう。とすれば、「下らぬ事に煩はされぬ事肝要なり」と決意している師に対して、些細な事に煩悶する姿が「創作 愚作家の犬」の主人公の姿なのである。それは確固とした自我を持つ志賀と、それを模倣するに過ぎない小菊の、それ故の自信のなさを象徴的に描いた作品ということにもなる。執れ尾崎一雄が『あの日の日』で、小菊の「小説の神様」⁽⁶⁾を引用しながら、志賀を取り巻いた加納和弘や兵本善矩、また小菊や自分までもが、志賀直哉という「高い土塀へ、鼻をつきつけ」、危うくそれに飲み込まれそうになったと回想する苦悩が、此処では背景に退いて、単純に賞賛されている。「虎の威を借る狐」のような生活からはつきりと目覚めるのが、昭和四、五年、恐らく志賀の影響で飼い始めた「ミス」の死と、その直前に発表された「雪の遠足」の衝撃ではなかったらうか。

「雪の遠足」と「淋しき存在」に触れる前に、もう一つ補足しておきたい。それは、小菊が志賀に接した大正十五年から、昭和

四、五年に執筆した「淋しき存在」までの間に、志賀が飼い犬を素材に書いた作品としては「犬」⁽⁷⁾（昭和三年一月「週刊朝日」）と「雪の遠足」（昭和四年一月「婦女界」）の二作があり、その二作が、志賀の作家としての充実期と、休筆期にはいる直前の精神状態を露わに示していると考えられることである。例えば、「犬」は、恰も小菊の「創作 愚作家の犬」の逆をいくような精神状態のもとに構想されている。その冒頭部は

飼犬の米（よね）がなくなつた事は私を不機嫌にした。然しそのため神経を苛立たす事はもう厭だつた。するだけの事をして、あとは運次第、縁次第。還つて来るものなら、来る、還らなければ、仕方がないと決めた。

で始まり、或る意味ではこの覚悟がうまく作用して、米の帰還に至るといふものである。その意味では、志賀と小菊の精神状態が、そのまま「犬」と「創作 愚作家の犬」に照応しているし、二人の人間関係を示してもいた。犬を介在とした志賀と小菊に焦点を絞れば、「創作 愚作家の犬」で理想化されたS氏は、「淋しき存在」においては、作中に引用された「雪の遠足」の作者として、小犬を虐待する暴君として批判に曝され、志賀を見る小菊の視線が百八十度転換していることが理解されよう。「淋しき存在」で書かれる飼い犬「ミス」の死は、足掛け四年にわたる志賀と小菊の、小菊の眼からみた遍歴の総決算でもあったのではないだろ

うか。

三

個別な関係はさておき、文学史的にみれば、「淋しき存在」が執筆された昭和四、五年が、昭和三年三月十五日事件以後の思想統制が強化された時代であり、プロレタリア文学内部でも、平林初之輔の「政治的価値と芸術的価値」の論争に典型的なように、プロレタリアかブルジョアかの二者択一が共産主義者の純化の潮流のなかで重要な問題になっていたことは周知の事実であろう。「二、九輪草」には、「淋しき存在」の前に執筆した、恐らく後年発表されることになる「鳩」（昭和十一年八月「文学界」と、内容の不明な「蟬」という作品について、

（昭和五年）母のことを書いた六十枚ほどの作品（後の「鳩」のこと＝筆者注）が、志賀先生の推薦で、はじめて雑誌「中央公論」へ送ってもらえたときは、嬉しかった。学校をやめて二年目の春だったから幸町へ行きはじめて三年経っていた。幾つかの習作の後に、ようやく出来た作品であった。

ところが、その原稿が、間もなく送り返されて来た。既成作家が書く過去の作品ならよいが、今から文壇に出ようとすもの、作品にしては、そこに時代のずれがある。理由はそういう意味らしかった。（中略）

「横田さんは、子供のことを書くのと、うまいね」
先生がそういった。お淳も、これは素直にかけたと思つていたので、ちよつと得意になった。

が、これも戻されて来た。東京からは、奈良は遠い遠い、呑気な田舎に見えるのか。子供のことを書くにも、天真爛漫な遊びそのものではダメで、東京では、遊んでいる子供までも、プロレタリアのイデオロギーを持って遊ばないと、通用しないらしい。長年教育の仕事をして来て、これにはお淳も少々疑問があつた。が、致し方ない。（三三）

とあつて、プロレタリア文学隆盛期の出版界の状況が記されているが、「淋しき存在」にあるのは、此処にある「プロレタリアのイデオロギー」に対する「疑問」が、貧者・弱者への労りは保持しながら、そういう画的イデオロギーからの変節として展開していることである。社会運動に奔走するm子の、主人公の犬の看病やカナリアを飼う生活を、「人間の生活」とは無関係な「童話劇」と揶揄することへの違和感や、産児制限の講演依頼を拒絶するところ、或いはコロンタイの⁽⁸⁾小説を一蹴するところなど、また、m子の背後に時勢に便乗する偽善を感じる主人公の立場は、それまでの主人公の執筆意図を変更せざるを得ないところまで、時勢に追いつめられていることを示している。二章の次のような文章、

彼女は、過去の長い職業生活を顧みて、世間の支配力に向つて、呼掛けてみたいと思ふ事を、幾らか持つてみた。其の事について、彼女はよく空想した。正義的な亢奮に震える事が度々あつた。だが、書付けてみると、紙の上に浮いて出る自分の姿に、何時も愛相をつかした。鬨争的で、理屈つぽくて、いやに見識張つた中年女の、自分と言ふものを、如何にも露骨に眺める気がして、不愉快で堪らなかつた。彼女は毎日、小説を書く事と、それを引破る事を、仕事にしてゐただつた。(二)

には、明らかにそういう時勢に対する主人公の創作への苦悩が描かれてゐる。そして厄介なことは、そのような苦悩を抱えているにも拘わらず、プロレタリアへの批判が直ちに変節として受け止められてしまうような情況があつたことである。それと同時にそんな主人公を描く小菊の態度が、主義や主張をもつた「主人持ち」⁽⁹⁾の小説を忌避する師・志賀の、ブルジョア的影響の結果ではないかと、身近な周囲に誤解される懸念があつたことである。

m子のモデルとしては、婦人運動家で戦後参議院議員を三期務めた奥むめおが想定される。奥むめおは、平塚らいてう、市川房江らとともに新婦人協会で活動、新婦人協会解散後、婦人連盟に参加するが脱退したのち、大正十二年職業婦人社を設立、機関誌「職業婦人」を発行する。六章の「産児制限」「常識運動家」とい

う言葉は、大衆婦人の立場から運動を展開し、婦人セツルメントを開設し妊娠調節相談部を置くなどの活動を実践した奥に重なるものである。小菊が初めて奥と知り合つた時期はわからないが、大正十二年六月「職業婦人」創刊号に、小菊は「職業婦人と言ふ女」(表紙目次では「言ふ」が「いふ」というタイトルの文章を寄せ、「職業婦人と言ふ名辞が確に自分のものだ」と感じ、「伝統的な因習から解脱して、創造の天地に新生命を見出さうとする女性」として「職業婦人」が手を携えていくべきだと述べている。六章の「m子は小さいながらも機関雑誌を持つてゐる」とある「機関雑誌」は、「職業婦人」の後継誌『婦人運動』のことである。小菊は奥の主宰する機関誌(大正十二年から昭和十六年にかけて『職業婦人』、『婦人と労働』、『婦人運動』)と誌名を変えて継続)に、大正十二年六月(創刊号)、大正十二年七月、大正十四年七月、大正十四年八月、大正十五年一月、大正十五年六月、大正十五年八月、昭和六年一月、昭和九年一月、短信も含め計九回文章を寄せている。小説は書いていない。本作の作品内時間に重なると思われる昭和四年頃には寄稿がなく、六章のm子の「度々原稿をお願いしたつて」「只の一度も書いて下さるんでもなければ」という言葉に呼応する。

奥は、戦後、小菊が奈良県婦人連絡協議会会長として、婦人会館の建設を成し遂げた際、その落成式に来賓として出席し祝辞を

述べている。

池田さんとは、若いころからお友達の間柄で、こうした婦人会長にしておくには、おしい方で、やはり池田さんは、作家としてもらいたかつたのです、が、皆さんにとつてはこの上もない良い会長さんでした。かれて誠に幸せと存じますが、婦人会館は東京でもまだ、かけ声のみで、胎動中ですのに、奈良で、しかもあのように完備した会館をお建ちになつた、皆さまの御力に敬意を表します、私は全国いたる所へ参つて居りますが、今日のように一県でこんなに多数の会員が集まる婦人会はございません、おそらく日本一だと思えます（『婦人奈良』十四号 昭和二十六年十月）

右の「作家としてもらいたかつた」という言葉は、六章のm子の「兎に角にもあの小説がお書けになつた事は事実だし」という言葉に響きあうものであろう。奥は、小菊を作家として認めしており、その評価のもととなる「あの小説」は「歸る日」を指している。大正十四年十一月『婦人運動』掲載のY.N生「歸る日」の会に出て」には、奥の発起により開催された「歸る日」の出版記念会のこと記されている。そこには、奥が身内の不幸で急遽出席できなくなり宇野千代を中心に会を進めたこと、吉屋信子、菊池寛も出席し祝辞を述べた当日の様子などが記されている。

奥むめおと重なりあうm子が、「淋しき存在」の主人公を叱咤

激励するのは、友人を能力ある作家と認めるからこそであろう。しかし、その友情を素直に受け取ることができないほど、主人公は追い詰められている。「淋しき存在」の主人公は、志賀の「雪の遠足」を引用し、その主人公の暴君的態度を批判し、それに虐待される小犬に、飼い犬「ミス」の臨終を、さらに自分の遍歴姿を重ねて、その末路を「自分と言ふ落伍者の、葬儀の場面を見るやうな悲哀」と実存的苦悩として書いている。しかし、m子の「人間の生活に無関係」に生きていると主人公を批判する口調には、主人公の抱える苦悩に由来する変節をブルジョア対プロレタリアという図式に単純化する観念性が覗いている。社会運動家と主人公の立脚点は、問題の質として、大きく食い違っているにも拘わらず……。主人公は、自分を評価してくれる友、かつては共鳴し得た友とも離れ、誰とも共有できない苦悩を抱え孤獨な戦いをするしかない。

さて、「淋しき存在」に引用された志賀の「雪の遠足」については、後年「クマ」（昭和十四年九月「改造」）という作品——昭和十年十二月七日の志賀日記に出てくる「橋本の小犬をもらつて来る」を素材に、その日貰った雑種のムク犬「クマ」が東京に転居した後迷子になるが、一週間後に偶然に発見されることを書いたもの。戦後の「盲亀浮木」ではその「クマ」が再掲載されて、「クマ」の偶然の発見を「運命の善意」を想起させるものとして

描いている——のはじめに、次のように、その主旨が述べられている。

「東京まで連れて行く犬ではないから、引上げる時は誰かに貰つて貰ふんだ」こんな事を私は何度も子供達に確かめて置いた。シエファード、エルデル、或ひは日本犬など純粋な犬が流行してる時、此種類の駄犬をいつまでも飼つて置く気はしなかつた。それに私は前の経験で、さういふ犬の野良犬根性には手古摺り切つた事があり、「雪の遠足」といふ小品にもその事を書いたが、駄犬には懲りてゐた。(傍点筆者)

このように書いた志賀の選民的な感情の好悪と、主人の後を追う「野良犬根性」丸出しの「小犬」の関係が、「淋しき存在」では、志賀に師事しながら、「駄犬」故に師に厭われ、或いは迷惑をかけているかもしれないという主人公のやるせなさを暗示しながら、同時に「取止めもない空想から離れられない」故に志賀に教わりながら、作品がものにならない「落伍者」としての弟子・小菊の将来への不安・恐怖としても描かれている。その根底にあるのは、師と文学への愛着を宿命的なものと自覚しながらも、或る面では弱者や貧者への同情を欠いたようにみえる「雪の遠足」の主人公に露呈する師への反感が、「淋しき存在」を書く小菊に、違和感や孤独感として強く感じられているからでもあり、同時に「淋しき存在」に読み取れるのは、そのような想いを抱えるに至

つた四、五年間の愛憎ともごもの二人の関係の清算の意図が籠められているからであろう。「ミス」が主人公に献身的で従順だったように、小菊が師・志賀に従順だった態度を、此処でハッキリと示さなければ、尾崎一雄の述べるように、志賀に呑み込まれてしまふかも知れない、「自分が自分らしく生きることができない」という存在の危機意識が強かつたことを示唆している。それは「ありのまゝの事実を書いた、追いつめられた言葉」という小菊の述懐にもあつた本音でもあつたろう。

そういう読みを具体化したような解説が「小説の神様」にある。

お淳も島津先生(志賀がモデル)筆者注)を知つた当時、先生の作品に敬意を表し、人柄を慕ひながら、その作品のブルジョア趣味や、主人公が大きい問題にして悩み苦しんでゐるそのことが、お淳にとつて必ずしも第一義的でないものや、また、主人公が何でもなく簡単に片付けてゐることの中に、お淳にとつて非常に大切な問題があつたりする場合のこなど、境遇と生活の開きの大きさが気になり、先生の作品をよんで、お淳が直接示唆され啓発されることよりか、その旦那風な、氣分任せな主人公の暴君振りに、反感を感じさせられることさへあつた。例へば、妻とか女中など弱い者を、癩癩の槍玉にあげてひどい扱ひをしたあとで、弱気を出して

優しくする一つの心理、島津先生の作品では、それが主人公に共通な一種の性癖みたいになつてゐたが、人には強いか弱いか誰にでもあるそんな普通の心理が、何か非常に特別な主人公の特異性のやうに扱はれ、日常すべての判断が主人公の感情的な不快で支配されるころまで、それが増長してゐるやうな場合、お淳はさうした主人公の性格の激しさを読みとる前に、文学の直感主観が恐ろしくなるのである。そして、さうした自身の性癖に苦しんでゐる主人公その人よりか、被害者の弱い者たちに同情させられ、自分を被害者の位置においてその場合を批判する。⁽¹¹⁾先生の文学以前に、父に似た人への思慕から入門しようとしてゐたお淳として、これは当然突きあたらなければならぬ矛盾だつたであらう。文学に対してお淳の懷疑は、そこからはじまったのだから、これがお淳の文学への出発だつたといへるかもしれない。それでゐて、これまでお淳が読んで来た日本の作家で、島津先生の文章ほど、お淳の心を引きつけた文章もなかつた。(五)

此処にある「作品への敬意」や、「父に似た人への思慕」から志賀に接近しながら、同時に抱え込まれる「ブルジョア趣味」や志賀への違和感という、小菊の「反対感情両立的な本音を、「当然突きあたらなければならぬ矛盾」として把握し、同時にそこにこそ文学に対する小菊の懷疑と、文学への出発があつたと回想され

てゐることは重要である。常套的ではあるが、此処には前述したプロレタリア的観点に立つことの問題とは別に、自己が経てきた師との関わりにも距離をおく深い反省があるし、その背後には、どのように自己の文学を確立していったらいいかと苦悩している姿が透けてみえる。その意味で、「淋しき存在」の末尾の、

ミスが彼女の家へ来たのは、生後三十八日目の時だつた。神戸の知合から貰つたもので、鼠のやうに小さかつた。足掛け四年と言へば、短い壽命には違ひなかつた。だが、大人になつて、チルを産み、育て、そのチルが已に大人になつてゐるのだ。ミス一代！しかし、長い時間が経つてゐるのだと、彼女は思つた。

は、象徴的言辭である。「足掛け四年」とは、大正十五年から志賀と関わつてきた小菊の飼ひ犬、「ミス」の一生であるとともに、その時点までの小菊と志賀の交流期間でもある。従つて、この末尾には、小菊の志賀への、敬意と批判ともごもりの四年間の総括が籠められてゐるともいえるし、同時にそれは、昭和四、五年のプロレタリア文学全盛時に、当時の小説家総てに課せられた難問でもあつた。論理的な飛躍を厭わずにいえば、江藤淳の『小林秀雄』の冒頭に、文学史という結果論からという限定はあるが、小林が批評家になつた一面として

夏目漱石から志賀直哉に屈折していった日本の近代小説が、

ふたたび屈折して小林秀雄において「批評」をうむにいたる過程の意味である。「Xへの手紙」の背後には明らかに「暗夜行路」があるが、そのむこうにはおそらく「明暗」がある。漱石が発見した「他者」を、志賀直哉は抹殺し去ることによって、「暗夜行路」を書いた。そこには絶対化された「自己」があるだけである。小林は、この「自己」を検証するところからはじめた。つまり、彼の批評は、絶対者に魅せられたものが、その不可能を識りつつ自覚的に自己を絶対化しようとする過程から生れる。これが芸術家の、しかも、きわめて近代的な芸術家のたどるべき道であることはいままでのさまざまな努力を象徴しているともいえる。

と指摘されているが、「淋しき存在」で小菊が描こうとしている世界も、そのような自分自身の存在に関わる難問への挑戦と苦悩を孕んでいた筈だし、「淋しき存在」に引用された「雪の遠足」の作者・志賀直哉にも、それは課せられていた問題ではなかったろうか。「淋しき存在」を、「今まで書いたうちで、今度のが一番いゝ」という志賀の評価は、休筆期の志賀のそういう根本的問題の本質を洞察した言ではなかったろうか。

四

前述「犬」と小菊に引用された「雪の遠足」を書く時期の、志賀の精神状態のギャップは、充実した執筆期から休筆期を迎えていた志賀の苛立ちが、露呈しているようにも思われる。志賀の休筆は必ずしもプロレタリア文学に対する反旗のような単純なものではなく、寧ろ小菊が「淋しき存在」で抱え込んだ、現代小説が抱える難問と同質なものを、彼も抱えた故だと推察するが、それが敢えてこの休筆期に入る直前に、我孫子での体験である小犬への苛立ちを動機にして「雪の遠足」を書かせたのではないだろうか。「主人持ち」の文学や社会主義には否定的だが、そのことを直ちにブルジョア性として否定し去る前に、小林多喜二文学への理解に窺えるように、主義主張を超えて、地に足の付いた自己の生を生きたる文学には肯定的だった点を見逃してはなるまい。小林秀雄の批評に通底する文学観は志賀のものでもあった。小林多喜二の死を聞いた時の日記、昭和八年二月二十五日付に、

MEMO 小林多喜二二月二十日(余の誕生日)に捕へられて死す、警官に殺されたるらし、実に不愉快、一度きり会はぬが自分は小林よりよき印象をうけ好きなり アンタンのる気持になる、不図彼等の意図ものになるべしといふ気する、

が社会主義革命への恐怖ではなく、死を賭した人の生命への愛おしみであることは明らかである。「雪の遠足」を「続創作余談」で、「書いた時は甚だ不出来のやうに思はれ、興味を持たなかつたが、近頃は或る程度の愛着を感じてゐる。」としている裏には、休筆期に入る昭和四、五年の自分の苦境が、昭和十三年五月の段階で肯定されているようにもみえる。時代相の相違は勿論あるうが、「野良犬根性」に引きずり回される「雪の遠足」の主人公の苛立ちに対して、自分の生を自分で引き受けていこうとする「淋しき存在」の主人公——。そこには、休筆期にはいる志賀と、それに追従してきた苦悩をどこかで突破する気概をも含んだ作品の模索を続ける小菊の苦悩、覚悟という違いがある。恰も難問を前にした視点が交錯しつつ、犬を介在させて文学の本質が深く洞察されているようにも見える。そういう直感が「淋しき存在」を読んだ志賀の評価には含まれていないのか。

そういう観点から見た時、興味深いのは、昭和五年の八月二日付の志賀直哉の小菊宛て書簡で、小菊が紹介したらしい田中さんという家庭教師を志賀が代えたいともらしいものに関連して、同年九月五日付相原菊子（網野菊）宛の志賀書簡に

池田さんには近頃好意を持つてゐます。此間から二度程麻雀をしました。

と記されていることは象徴的である。志賀の好意は、「淋しき存

在」についての読後感が、その作者にまで及んだことを示している。にも拘わらず、「二、九輪草」にある「これは、発表するところを、好まない」といわれてうなずく小菊の姿を見ている志賀は、単純にブルジョアである自己への批判を「淋しき存在」にみているわけではなく、その根底に、プロレタリアやブルジョアの枠を超えて、自己の生を文学で模索する小菊の真摯さ、則ち文学することと生きることとの不即不離の関係を模索する小菊の姿を実は認めて、寧ろそれがプロレタリア対ブルジョアの構図で読まれることの懸念からとも考えられる。同時に、「雪の遠足」にある暴君としての自己の過去の姿を、「淋しき存在」に引用されて、このような読みもありうると、休筆期に省察しているのではないか。「淋しき存在」の志賀の読後感が「二、九輪草」で間違いなく記されているとすれば、自分の道を自分で歩くしかない師と弟子の苦難な時期の交感としてみることもできよう。前号で掲載した「ナハロフカ」は、そういう新しい文学模索の中から小菊が生み出した小説であることになる。

(1) 注

前号の「りずむ」第三号の「ナハロフカ」の解説でも引用した、昭和六年六月からの満洲旅行や「ナハロフカ」のメモが中心の「雑記帳」に、ペン書きで、「淋しき存在」冒

頭と重なる草稿が切れ切れながら読み込めるので、六年執筆の可能性も捨てきれないが、この「雑記帳」の最初は、「開業一ヶ月決算報告」であり、生田幸平（武田好昭）著「評伝 池田小菊」の38頁にある「このころ、小菊は鹿一」とわ子兄妹を呼びよせて、近鉄奈良駅前に「紀の国屋」という果物店を出させた」とあり、その「決算報告」であることが解る。その開店時と執筆時が近接することも考えられる。生田氏の「このころ」は限定しにくいのが、鹿一氏の結婚が昭和五年十月だから、このメモに従えば大凡四、五年の二月頃の執筆と推定してよさそうである。因みに「二、九輪草」では、昭和五年の項として「淋しき存在」が回想されているが、注3のような錯誤もあるし、志賀の「雪の遠足」の発表、直後の「ミス」の死を直ちに執筆する可能性も否定できないので、此論では昭和四、五年執筆説をとっている。

(2) 「雪の遠足」については、昭和三年十月二十六日付、網野菊苑の志賀直哉書簡に「私は相変ず^{あかかわ}怠けてゐますが婦女界新年号の為に「雪の遠足」といふの書きつ、あります、雪の日」の翌日の事ですが気持は別のものになりさうです。」とあるし、「続創作余談」には「雪の遠足」は我孫子生活の或る一日で、「雪の日」の翌日の事である。二つを一つのものに書くつもりだったが、「雪の日」を急いで出さねばならぬ事情があつて、半分を出して了つたために、後が続けられず、何年か経つて、その続きを書いた

のが「雪の遠足」となつた。書いた時は甚だ不出来のやうに思はれ、興味を持たなかつたが、近頃は或る程度の愛着を感じてゐる。」とも回想されている。

(3) 「二、九輪草」は、「小説の神様」の草稿として位置付けられるもので、戦後の執筆である。長年にわたる志賀との関わりを回想したのだが、事実とズレた所も散見する。この引用部四章の末尾に、「淋しき存在」の読後感を聞いた小菊が、志賀邸からの帰途、春日神社でひいたお神籤の卦が「——今日もまた同じところを行き帰える、多分キツネに騙された人——」とでたことが記されているが、それについては、実は昭和七年九月一〇日の小菊の「日記」に朝「田舎者」を持つて志賀さんへ出掛け、春日さんへ参つて、御くじをひいた。それにかう書いてある。

幾度も同じ所を行き戻る
多分キツネにだまされた人
と記されている事実がある。

(4) 志賀に示した原稿を書き直したものが、此処で翻字した原稿だと考えられる。従つて「二、九輪草」の中では、本文のm子に該当する人物がS・T子となつていたり、そのS・T子が主人公を批判する「横田お淳はとうとう座敷飼いの小犬になつた」という言葉が、もつと明確な「職場に働いて来た先生が、今ごろブルジョア作家に追従するつて、法がありませんわよ」というセリフとしても書かれてもいる。「二、九輪草」内で言及されている志賀に示したと思

られる「淋しき存在」の内容と、ここで翻字した原稿とでは、こういう改変はあるが、要旨には大きな改変はないと思われる。また、今回ここで翻字した原稿は「鉛筆のシルシのついた」形跡など一切ない清書原稿である。

(5) 「叙説」第三三号、「池田小菊関連書簡——志賀直哉未発表書簡を含めて——」の注記7（二 六六頁下段）に「姉とよの死（昭和九・四・一三）前後から犬を飼いはじめたと思われる」と記した事をここで訂正したい。小菊はここで記したように、大正十五年の段階で飼い犬を始めていた。「創作 愚作家の犬」の名は「エル」、記述に従えば、「エル」が「ミス」に該当し、その直前にも、牡犬が飼われていたらしいことも記されている。因みに「淋しき存在」の「ミス」が産んだ「チル」は、昭和七年の「日記」にも登場するが、「奈良」に書かれる「ダニー」の初出は昭和八年七月十四日の「日記」で、「ミス」「チル」と「ダニー」の間には断絶がある。

(6) 小菊の弟子の武田好昭（生田幸平）氏によって、昭和四十七年五月号の「関西文学」に発表されたもの。此の「小説の神様」の草稿にあたるもの一つが「二、九輪草」である。「小説の神様」には、小菊が師事した志賀直哉と自分との関係を軸に、小菊が志賀と知り合った大正十五年から昭和十三年迄の、所謂高畑サロンにいた連中の、偉い師・志賀をもったがための、取り巻き連の苦悩が色濃く描かれている。尾崎一雄著『あの日のこの日』の下巻、百八〜百十

四参照。
此作と小菊との関わりで言えば、

「犬」これは岡本に谷崎君を訪ね、一緒に神戸に出て、其処で買つて帰つた犬だが、或時あなくなつて、それを尋ね出した事をそのまま書いたものだ。「週刊朝日」に出ると、間もなく奈良県の警察部の人が訪ねて来て、私は大変礼を云はれた。巡査が私に親切だつたことを書いたので、それを時の警察部長が喜んでくれたのだ。

何年か経つた。私の所に始終来る女流作家の池田さんが赤に金を百円とか出したといふので、警察へ曳かれた事がある。皆心配した。私も心配して既に夜十時過ぎてゐたが、警察署長の官宅へ弁明に行つた。その署長といふのが、前に「犬」で、私の所に礼に来てくれた人だつたので、話は大変都合だつた。夜一時頃池田さんは許され、私の家に礼に来た。「犬」はかういふ妙な事に役立つた作品だ。（続創作余談）

という後日談をもつていることも興味深い。

(8) アレクサンドラ・ミハイロヴナ・コロンタイ（一八七二—一九五二）。「ソビエト政府の党中央委員会婦人部長に就任中、女性の権利保障と母子保護の制度化に取り組み、夫婦平等に基づく民事的結婚、離婚の自由、庶子と嫡出子との権利平等、産前産後の有給休暇、母子手当支給、共同保育所などを実現した」（谷口絹枝「昭和初期におけるコロンタイの恋愛観の受容」『熊本の文学 第三』一九九六年三

月)「レーニンの新経済政策に反対し、除名になった一時期もある」が「一九二三年から世界初の女性外交官としてノルウェー、メキシコ、スウェーデンに滞在」、以下、谷口によると、一九二三(大正十二)年に発表した小説集『働き蜂の恋』の邦訳、昭和二年 松尾四郎訳「赤い恋」(原題「ワツシリツサ・マルイギナ」、昭和三年 林房雄訳「恋愛の道」(原題「三代の恋」(姉妹)が大きな反響を呼び、コロンタイの「女性が恋愛道徳より社会的な義務に生きる意義は大きい」とする「恋愛私事」説が、「自由恋愛」論としてコロンタイズムと呼ばれ、日本のプロレタリア恋愛小説にも影響を与えたという。

志賀直哉の昭和六年八月七日付小林多喜二宛書簡にある「私の気持から云へば、プロレタリア運動の意識の出て来る所が気になりました。小説が主人持ちである点好まませぬ。云々」による。

(10) 此の「野良犬根性」の「駄犬」については、大正九年に発表されたと思われる「畜犬に就いて」でも、既に次のように述べられていて、

私は何れかと云へば犬好きです。今飼つてゐる小犬は別に愛してゐませんが、二三年前までゐたテルといふグレーハウンドの雑種の大きい犬などは随分愛しました。人間でもどうしても愛する気になれない性の人間と、さうでないのがあるやうに、幾ら犬好きでも、犬によつて此方の気持も色々になると思ひます。概して野良犬の

子の野良犬根性を多分に受け継いだ犬はどうも気持がピツタリ行きません。そして私は人なつっこい犬でもお世辞使ひの気持の強い犬は好きしません。余りに気持の上の交渉を強ひて来るので面倒になります。寧ろ普段は不愛想な位落ち着いてゐて、本統に喜んだ時だけそれを現して呉れるやうな犬が好きです。(傍点筆者)

「雪の日」に「エス」と名付けられている小犬が「雪の遠足」の小犬であり、それと此処に出て来る傍点部の小犬は同じ犬だと考えられる。小菊はこの小犬に自分を重ねて「淋しき存在」を書いてゐる。

(11) 貧者・弱者への同情は、教育者として活動していた時代から小菊には強くあつた。従つて「淋しき存在」ではじめて自覚されたものではない。「池田小菊未発表原稿「思はぬ旅」(「りずむ」創刊号掲載)の後半に、教育実習生との教材批評のなかに志賀の「家守」や「流行感冒と石」などを例に、同主旨の志賀文学批判が、大正十五年以前の志賀との違和感として回想されている。そういう志賀批判が、社会運動家のm子には小菊の本質として固定観念化されていることの方が寧ろ問題で、「淋しき存在」執筆時の小菊の関心は、m子には届かない個人の生・文学の本質を問うことだったといえる。

(12) 『叙説』第三三号「池田小菊関連書簡——志賀直哉未発表書簡を含めて——」を参照。